

ヤナギ

植村 榮

京都に「出町柳」という名の駅がある。これは市内から北へ八瀬、比叡山、鞍馬寺、貴船神社などに向かう叡山電車（通称は叡電）のターミナル駅であり、また、大阪と京都を結ぶ京阪電車の京都側のターミナル駅でもある。この近くで賀茂川と高野川が合流して鴨川になるのだが、その合流点の東側にこの駅があり、一方、西側の地域は柳がつかずに単に「出町」と呼ばれている。歴史的には「出町」の方が遥かに古くから知られており、都から若狭の方に向かう若狭街道や鞍馬街道（どちらも鯖街道とも呼ばれる）、さらには琵琶湖につながる山中越えの道などの出発点である。鯖街道口という石標も立てられており、「出町」は洛北から都に出てくるところ、あるいは都から外に出て行くところということから付けられた名前なのである。聞くとところによると、東側の地域は人家は少なかったものの柳が多く植わっていてそれにちなんだ地名があったらしく、100年ほど前の大正時代末期に叡電が開通して駅ができたときに両者の名前をとって「出町柳」が誕生したとのことである。そういえば、春には駅近くに植えられているしだれ柳が揺れているのをよく目にする。

ところで、ヤナギには枝が垂れ下がる種類（柳）のほか、枝が立ち上がる種類もあり、それに対しては楊という漢字が当てられている。柳は中国原産なのに対して楊は我が国で自生しているものであり、ネコヤナギやアカメヤナギなどはこの種である。当然のことだが中国には古くから楊の字はあり、唐時代（618～907）の五言絶句や七言絶句などには折楊柳とか楊柳枝というような言葉がしばしば見受けられ、これは人との別れに柳の枝を手折って渡すという習慣を意味している。王維（701～761）の「送元二使安西」という有名な七言絶句「渭城朝雨浥輕塵 客舍青青柳色新 勸君更盡一杯酒 西出陽關無故人」、漢詩を横書きにするなどどこかごちないが、その第二句にも柳が現れている。長安の北にある渭水という河のあたりに朝降った雨によって埃っぽかった旅館やその前に植わっているしだれ柳の並木が青々生き生きとしているという情景である。気の合った友人など全くいない遥か西方にこれから赴任していく元二とのこの河畔での別れを惜しむ第三句と第四句、特にもう一杯の酒が心に響く。

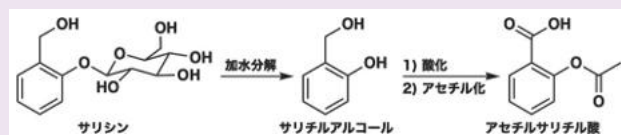
話は変わるが、京都伏見の日野の里に「ひのやくし」の名で親しまれている真言宗の法界寺というお寺がある。ここは、定朝様式で優美な国宝の丈六阿弥陀如来坐像があること、親鸞聖人の生誕地であること、さらには足利第八代將軍義政の正室・日野富子の出身地などとして知られている。ここでは、正月早々の修正会しゅうしやうえで無病息災と五穀豊



出町柳駅と柳の木

穰が祈願された後、ずっしりとした柳の木の棒の先に挟まれた厄難除けの護符（お札）が配られる。神仏において古くから呪力が宿る樹として知られている柳よりしろを依代として田の神を迎え、これを田畑の周りの畦道に立てて魔除けや虫除けにして豊作を願う1つの民俗行事である。

あるとき、この行事について、魔除けの意味は一応わかるのだがなぜ虫除けになるのか、その科学的根拠はあるのだろうか、とさる佳人に尋ねられたことがある。ヤナギは樹皮にフェノール系水酸基を多く持つある種の化合物類を持ち、菌や虫から自らを守っているとの説もあるようだが、それが田畑での虫除け効果につながるのかどうかは残念ながら筆者にはまだ定かでない。しかし、ヤナギの葉や樹皮が熱を下げたり痛みを和らげたりする作用を持つことは古来から知られており、その有効な化学成分はサリシン（salicyn: サリチルアルコールのD-グルコース配糖体）であることは明らかになっている。これを加水分解後に酸化すると消炎鎮痛作用を持つサリチル酸が得られ、それをアセチル化するとアセチルサリチル酸となる。ドイツのバイエル社がこれの化学製造法を開発して商標名をアスピリンとした。解熱・鎮痛および抗炎症剤として1世紀以上にもわたって人類に役立っている副作用の少ない超長寿命医薬品である。



ところで、爪楊枝つまようじという言葉があり、これはヤナギが歯痛止めにも役立ったことを示しているのであろうが、「妻用事」とか冗談を言って楊枝を手渡してもらっていた、まだ十分に歯があった頃が懐かしい。